



『第十卷』の発刊にあたって

熊本県議会議長 高野 洋介

熊本県議会史は、明治一二年の新制度発足に伴う本県議会開設以来の歴史をつまびらかにするとともに、先人の功績に学び郷土発展への道しるべとするための史料を整備することを目的として、昭和三八年の第一巻の発刊以来、巻を重ねて参りました。途中、県財政健全化への取り組みの中で平成六年度から休止を余儀なくされましたが、平成二五年度、第八巻から編さんを再開し、このたび、第十巻が発刊の運びとなりました。

第十巻には、令和三年六月に開催された熊本県議会史第十巻編さん委員会で決定された編さん方針に基づき、平成一一年四月から平成二三年四月までの三期一二年分を収録しています。

この期間を顧みますと、世界情勢では、二〇〇一（平成一三）年九月一日のアメリカ同時多発テロ発生以降、米国は長期にわたりアフガニスタン、イラクにおける戦争を余儀

なくされました。経済では、二〇〇八（平成二〇）年九月、米国証券大手リーマン・ブラザーズの経営破綻に端を発した世界同時株安、金融危機による世界同時不況が日本の輸出産業を直撃、国内景気は冷え込みました。北朝鮮による拉致問題では、平成一四年九月、小泉首相が北朝鮮を訪問、金総書記が日本人拉致について謝罪し、拉致被害者五人が二四年ぶりに帰国しましたが、熊本市出身の松木薫さんをはじめ、横田めぐみさんらの帰国はいまだ実現していません。

国内では、平成一一年に男女共同参画社会推進法、中央省庁改革関連法、地方分権整備法および食料・農業・農村基本法が成立し、一二年四月に介護保険制度がスタート、一四年には温室効果ガス排出量削減を義務づけた京都議定書の批准が衆議院で承認されました。一五年一月、三位一体改革に伴う補助金削減が実施され、財政構造は大きく変化しました。一七年には郵政民営化法案が成立。二〇年三月「消えた年金記録」が問題化し、二一年九月、民主党政権へ移行。二三年三月一日、東日本大震災が発生、津波等による死者行方不明者は二万人近くに及び、東京電力福島第一原子力発電所で炉心溶融（メルトダウン）が発生しました。

県内では、平成一一年秋に第五四回国民体育大会「くまもと未来国体」が開催され、翌一二年三月に県営天草空港が開港。同年四月には、急逝した福島譲二知事の後任に県政史上初の女性知事として潮谷義子知事が誕生。潮谷知事は、同年六月に新県総合計画「パートナーシップ21くまもと」を発表し、県民とのパートナーシップを県政運営の基本に「元

気で明るい熊本づくり」を目指しました。この間、三位一体改革等により深刻化した財政再建問題、平成一六年一〇月、水俣病関西訴訟の最高裁判決による国・県の賠償責任確定を受け新たな申請者が急増した水俣病問題、さらには利水訴訟での国敗訴、球磨川漁協による漁業補償否決、民間団体からの治水代替え案提示を発端とした住民討論集会開催等、混迷を深めた川辺川ダム問題など、多くの課題を抱えました。

また、いわゆる平成の大合併では、一五年四月のあさぎり町誕生から二二年三月の熊本市の合併まで、一七地域（一〇市、六町、一村）の合併が実現し、市町村数は、それまでの九四から四五に半減しました。熊本市は、合併特例法により二四年四月に政令指定都市に移行しました。

長年待ち望んだ九州新幹線鹿児島ルートについては、平成一六年三月に先行開業した新八代―鹿児島中央間に続き、二三年三月一二日、博多―新八代間の開通により全線開業となりました。

平成二〇年四月に就任した蒲島郁夫知事は、「くまもとの夢4カ年戦略」を策定。「県民幸福量の最大化」を目指し、「経済上昇くまもと」「長寿安心くまもと」「品格あるくまもと」「人が輝くくまもと」の四つの分野、ならびに行財政改革、川辺川ダム問題、水俣病問題に重点的に取り組むこととしました。このうち川辺川ダム問題では、九月定例県議会において知事が白紙撤回を表明、ダムによらない治水策実施へとかじを切りました。

自然災害では、平成一一年九月の台風18号で発生した高潮により不知火町松合地区で

二人が犠牲となり、不知火海沿岸域の広範な農地が被害を受けました。また、一五年七月の集中豪雨により水俣市で大規模な土石流が発生し、一九人が犠牲となりました。

この第十巻においては、当時の議員各位が県執行部と活発な議論を重ねながら、これら県内外の課題に対応すべく調査・要望活動を重ねるなど熱心な議会活動を精力的に展開されたことが記録されています。幾多の困難を乗り越えながら県勢の発展に尽力された先輩諸氏の軌跡をたどることは、今日的な課題に直面している我々に貴重な示唆を与えてくれるものと存じます。

最後に、編さん委員会の各委員、監修および執筆にあたられた編集会議の各先生、とくに平成二五年の編さん再開から昨年五月まで一二年間にわたり編集会議議長兼監修者としてリーダーシップを発揮された故猪飼隆明氏に、深甚なる敬意と謝意を表するものであります。また、編集にあたり資料提供その他ご協力いただいた関係各位に対しまして、心よりお礼申し上げます。

令和七年九月